令和5年度

社会貢献事業

優秀実践アワード

（きらっと光る実践）

報告書

社会福祉法人大阪府社会福祉協議会 老人施設部会

はじめに

大阪府社会福祉協議会　老人施設部会の会員施設が、「私たちは、この地域（まち）を支えます」をフレーズに始めた社会貢献事業（生活困窮者レスキュー事業）は、令和5年度に20年目を迎えました。

これまで、会員施設は、“社会福祉法人の使命”として、制度の狭間の生活困窮に対する経済的援助（現物給付）や、施設のコミュニティソーシャルワーカーと連携し相談支援を実施する社会貢献支援員の配置等、先駆的な取り組みを実践してきました。

また、地域の課題やニーズに向き合い、施設の専門性や強みを生かしながら、様々な地域貢献活動にも尽力してきました。さらに、新型コロナウイルス感染症の影響が長引き、物価や光熱費高騰の厳しい状況にあっても、関係機関・団体と協働し、目の前の課題解決に向けて幅広く地域における公益的な取り組みにチャレンジしています。

このたび、このような取り組みにスポットを当て、継続性や独自性、先進性等について優れた実践を行っている会員施設を表彰し、内外に情報発信を行うことを通して、地域課題の解決および地域福祉の振興、さらに社会的評価の向上等を目的に、「優秀実践アワード（きらっと光る実践）」を創設しました。

本報告書には、11の実践（事例）と選考結果を掲載しております。このような社会貢献活動に頑張っている法人・施設の取り組みを知っていただくことで、施設関係者においては、地域における公益的な取り組みの具体的な実践の参考にしていただきたい。また、福祉を学んでいる学生をはじめ福祉に興味・関心をお持ちの皆さんにおいては、地域福祉の担い手として取り組んでいる社会福祉法人が、あなたの身近にあることを知っていただきたい。

このような願いと期待をこめて、豊かな実践が広がることを目的にこの報告書を作成しました。発刊にあたり、あらためて、推薦書の提出や関係資料の提供にご協力いただきました皆様、選定にご協力いただきました選考委員の皆様に厚くお礼申しあげます。

社会福祉法人 大阪府社会福祉協議会

老人施設部会長　**西田　孝司**

目次

（掲載事例・選考結果）

【大　賞】〈社会福祉法人 秀幸福祉会〉
・自治会組織が解散した高齢化が進むUR団地の活性化について
～古き良き時代を思い出して～ …… ❷

【優秀賞】〈社会福祉法人 亀望会〉
・こども食堂「こすもすまいる食堂」の立ち上げ・運営 …… ❹

【優秀賞】〈社会福祉法人 こばと会〉
・地域交流サロン“ぽっぽ”の活動について
～地域交流サロン“ぽっぽ”が地域の拠り所になりますように～ …… ❻

【優秀賞】〈社会福祉法人 聖徳会〉
・ワンコイン型介護予防教室「健康スタジオまつばら」が地域の居場所づくりの拠点に!! …… ❽

【優秀賞】〈社会福祉法人 もくせい会〉
・かたの七夕プロジェクト
～世代を超えて心がつながる願いごと～ …… ❿

【優秀賞】〈八尾市特別養護老人ホーム施設長会〉
・連携システム『八尾モデル』を活かして …… ⓬

【奨励賞】〈社会福祉法人 聖徳園〉
・高齢者の居場所作り
～いつまでも「エール香陽」に行こうよう!～ …… ⓮

【奨励賞】〈社会福祉法人 成光苑〉
・出張相談会（市役所への無料送迎あり） …… ⓰

【奨励賞】〈社会福祉法人 玉美福祉会〉
・地域のかけはしになれるか?!『にこにこ食堂』 …… ⓲

【奨励賞】〈社会福祉法人 八尾隣保館〉
・『もったいない』を『ありがとう』に変えるフェスタ …… ⓴

【奨励賞】〈社会福祉法人 ライフサポート協会〉
・なごみ食堂 …… ㉒

令和5年度　大阪府社会福祉協議会 老人施設部会
社会貢献事業「優秀実践アワード（きらっと光る実践）」募集要項（一部抜粋） …… ㉔

自治会組織が解散した高齢化が進むUR団地の活性化について

～古き良き時代を思い出して～

大　賞　　社会福祉法人　秀幸福祉会

設立年月／昭和54年2月
法人所在地／大阪府茨木市庄2丁目7番35号
理事長名／中尾　巌
施設所在地／大阪府茨木市庄2丁目7番38号
施設長名／庄栄エルダーセンター
中尾　巌
問合せ／☎080-8946-3999　FAX072-631-5141
✉cswelder@ab.auone-net.jp
担当：神野　享士

活動の背景・きっかけ

現在、CSW（コミュニティソーシャルワーカー）として担当しているUR総持寺団地。高齢化率52.5%、世帯構成1.4人にあるこの団地の自治会組織が、4年前に解散した。

これまで毎年あった夏祭りなどのイベントが全て無くなり、団地の住民同士の関わり合いがさらに希薄になった。

住民、特に高齢者の孤立化、孤独化が最大の問題であり、今後起こり得る様々な課題に備え、住民と関係機関が問題意識を共有して理解し共同で取り組んでいる。結果的に住民主体で団地の活性化を図ることを目的とする。

活動内容

〈定期開催催し〉

● 「UR総持寺団地支え合いミーティング」
毎月1回開催。活動内容等について、構成メンバー（約20名）で検討する。

● 「よりそい相談会」
毎月第2･4金曜日13時から16時に集会所にて、民生委員、社協地域担当、CSWが住民の生活上の相談に対応（1回につき、2～4名の方来所）。

● 「カフェよりそい」
毎月第2金曜日13時30分から15時30分まで集会所にて、福祉委員ボランティア（約4名当番制）でワンコイン（100円）カフェを開催（1回につき、約20名来所）。

● 「よりそいニュースレター」の発行
年4回、団地に特化した記事を掲載。全戸（約1,800戸）配布する。

〈不定期開催〉

● 「昔懐かしの写真展」
住民から集めた賑わっていた昭和時代の写真（約150枚）を2日間に渡り展示。約150名の来場者あり。

※今後の計画として、集会所周辺の花壇「憩いの場」の草花の植付（費用をURが負担）。

活動体制

「UR総持寺団地支え合いミーティング」の構成メンバー

団地住民／元自治会長、民生委員、一般住民
関係機関／URコミュニティ、茨木市社協、高槻市社協、茨木市福祉委員会、CSW、地域包括支援センター
協力大学／追手門学院大学、立命館大学

※上記のメンバーにて活動内容等を検討。企画、運営を担う。
※今後の予定として、一般の団地住民ボランティアを募集。

活動の成果

UR団地住民を中心に様々な立場で「出来ること」等を意見交換することで、自治会組織が無くても活動的になれるという躍動感が生まれた。

自主的に「出来ること」から企画運営することで「やらされてる感」がなく、参加者の皆さんが「笑顔」で取り組めている。.

URコミュニティも参画してもらえ、「よりそいニュースレター」の用紙代、集会使用料等も負担してもらえ、より活動の範囲が広がった。

団地住民から「楽しい」の声をたくさんいただけていることが、何よりもの成果である。

印象に残っている、もしくは力を入れた事例

● 協力大学の学生との意見交換を重視。

福祉専攻ではない（社会学部、経済学部、地域創造学部等）彼らとの対話により、学生目線での斬新な意見が聞け、福祉的な考えのみで団地の課題を捉えていた我々福祉従事者としては、「目からうろこ」を体験することができた。

● 協力大学の学生企画のイベントを開催。

協力大学の学生が企画したイベント「よりそいカフェ+（プラス）」、団地住民を対象に「イチゴ等の苗の鉢植え」「脳トレ」「けん玉体験」「血管年齢、骨密度測定」「漫談会」等の内容で開催。約50名の参加者を数えた。

※団地住民からすると学生が一生懸命に自分たちのために取り組んでもらえている姿に感動して、普段以上にいきいきと楽しんでおられた。

課題と展望

〈課題〉

①福祉ボランティア、民生委員、元自治会長等の運営側の高齢化。
- 上記担い手が70代から80代半ばである。

②関係機関の担当職員の交代。
- 社協、URコミュニティの担当者が変更する可能性があり、これまでの取り組みの継承が課題。

③協力大学生の維持。
- 上記同様、年度ごとで学生の顔ぶれが変わるので、学生たちに興味を持って継続的に参加してもらえるような仕掛けづくりが必要。

〈展望〉

一般の団地住民に呼びかけ、福祉の垣根を超えた取り組み（趣味の個展や教室の開催、作品即売会等の開催）。

団地内の遊歩道をウォーキングコースとして整備し、市と協働して住民の健康づくりを図る。

※とにかく、楽しいイベントを継続的に開催することができる体制を整備することが不可欠と考える。

活動風景

昔懐かし写真展

漫談会

カフェよりそい

大学生によるスマホ教室

協力大学生

こども食堂「こすもすまいる食堂」の立ち上げ・運営

優秀賞　社会福祉法人 亀望会

法人所在地／大阪府大阪市西区江之子島1-8-44
理事長名／多根　一之
施設所在地／大阪府大阪市西区江之子島1-8-44
施設長名／佐藤　浩美
問合せ／☎06-6225-2662　FAX06-6225-2663
担当：村山　直子

活動の背景・きっかけ

以前から意向はあったが、日々の業務に追われ、新しい事に着手する時間の余裕がなかった。しかしコロナ禍で様々なものが制限された為に、考える余裕が持て実現へと繋がった。活動するにあたり、施設の所在地である大阪市西区の将来ビジョン、地域福祉ビジョンとマッチしていること、地域貢献活動としてだけではなく、法人のメリット「様々な年代に向けての法人・施設の認知度」「福祉に触れることでの若い世代への人材確保」「幼少期から福祉にかかわることでの人材育成」等も活動を行うきっかけとなった。また、コロナ禍という時流を逆手に取った「テイクアウト方式」での開催で、準備と人員を最小限にすることができた。

活動内容

令和4年9月9日から月1回、毎月第2金曜日開催。特別養護老人ホーム江之子島コスモス苑とケアハウスコスモスガーデンの2か所で実施。開催時間はコスモス苑16時～17時30分、コスモスガーデン17時45分～18時30分と時間帯を分けて実施。対象者については限定なし（誰でも可）とし間口を広げている。1食につき150円を徴収。環境への配慮として容器は持参としている。提供メニューはテイクアウト方式の為「おにぎり2個と汁物」。50食程度を提供し、2施設合計で上限50食。申込は「LINE」「電話」「来苑」での予約制とし、初回に規約説明・同意書を取る。広報はLINEの告知とポスター掲示。4～8名のスタッフ（ボランティアを含む）で実施している。

活動体制

スタッフは職員4～8名。在宅・施設・事務部門等、法人の様々な部署からのメンバーで構成している「地域貢献委員会」と職員ボランティアで実施。今後、施設の感染症防止対策を行いながら地域ボランティアの受け入れを行う予定。

現時点での協力企業及び団体。「大阪府及び大阪市・区社会福祉協議会」（広報や連携の調整、相談等）、「株式会社ライフコーポレーション」（「阿波座駅前店」「堂島大橋店」「土佐堀店」より月1回第1木曜日に食材提供）、自施設の給食委託先である「株式会社メフォス」（食材発注・食材の下処理等）「フードバンク大阪」（食材提供）。活用事業は「地域こども支援ネットワーク事業」（食材、物資等提供、寄付等の紹介）「大阪府こども食堂における食の支援事業（食材等提供）など

活動の成果

この9月で初回開始から1年を迎える。コロナ禍でのスタートでもあり先の見えない中、開催当初は、老人施設としてはあまりなじみのない「子育て世代」に受け入れられるのか不安があった。しかし、開催4回目を迎えるころには毎回定員数を超える予約があり、開催日一週間前に受付を終了するようになった。

SNSを通してのやり取りについても手探り状態で始めたが、回を重ねていくうちに、次回の予約時に前回の感想やお礼の言葉が添えられ、こちらのモチベーションUPにもつながった。また、普段ではつながりのない企業とのつながりもでき、これまで以上に地域とかかわりが深くなってきていると思われる。

印象に残っている、もしくは力を入れた事例

こども食堂を通して「株式会社ライフコーポレーション」との関係を築けたことである。準備段階で「周囲の協力は不可欠」ということで、施設から一番近いスーパーであるライフにオファーを求めようと考え、令和4年6月に本社宛てに協力依頼のメールを配信。1週間後にサステナビリティ推進部の担当者より電話連絡があり、趣旨を説明。その後、文章でのプレゼンを行い担当者来苑。令和4年11月に協定を結び、同月より月1回第1木曜日に「阿波座駅前店」「堂島大橋店」「土佐堀店」3店舗より食材提供が行われるようになった。「賞味期限内ではあるが、社内基準で販売できないもの（生鮮食品を除く）」米、お菓子、飲料、調味料、季節商品（餅・チョコレート）などの提供がある。現在は食材提供のみではあるが、双方にとっての社会貢献事業の発展につながるよう、新しい取り組みについても積極的に声をかけ、つながりを確かなものにできればと考えている。

課題と展望

外部とのつながり・交流を広げていくには特養として「お年寄りを守る感染対策」は必須である。地域の風潮と足なみをそろえながら、きちんと感染対策を行うというのは大きな課題である。また、施設内の限られた場所を「入所者」「面会者」「地域住民」で、いかに有効に効率よく使用するかも課題の1つである。

「亀望会」を様々な人に知ってもらい、理解を得ながらテイクアウトではなく、食堂形式での食事提供へとシフトしていく。そして今以上に「人と人」「企業と企業」あらゆる「つながり」を大切にしてしっかりと地域に根付いた法人を目指す。

活動風景

地域交流サロン“ぽっぽ”の活動について

～地域交流サロン“ぽっぽ”が地域の拠り所になりますように～

優秀賞　社会福祉法人 こばと会

設立年月／昭和44年2月
法人所在地／大阪府吹田市山田西1-26-27
理事長名／正森　克也
施設所在地／大阪府吹田市山田西1-26-27
施設長名／特別養護老人ホームいのこの里
山本　智光
問合せ／☎06-6877-7020　FAX06-6816-5111
✉inokonosato@kobatokai.jp
担当：山下　和子

活動の背景・きっかけ

いのこの里は、地域貢献のとりくみとして、配食サービスや、生活困窮者レスキュー事業、かぎ預かり事業などの取り組みを他団体と協働し実施しています。
開設当初から法人の運営理念でもある「地域に開かれた施設運営」の実践として、ボランティアさんを積極的に受け入れてきました。

新型コロナ前は、年間延べ約3300名のボランティアさんを受け入れ、いのこの里でさまざまなボランティア活動を行って頂き、地域福祉の拠点としての役割を果たしてきました。

2019年6月に、いのこの里に隣接する住宅を活用し、ボランティアさんが集い、地域の方々との交流をより一層深めることを目的とした　地域交流サロン『ぽっぽ』の活動を開始しました。

活動内容

地域交流サロン“ぽっぽ”は、道路に面した三階建の建物で、一階はカウンターのある喫茶スペースでカフェやサロンとして気軽に利用できます。二･三階は、職員の休憩室もあり、会議スペースがあります。主に高齢者の方が集う交流の場になっています。障がいがあっても認知症があっても生きがいを持って活動し、時には子どもたちも立ち寄って世代間交流もできる居場所づくりをめざしました。月1回ニュースを発行しています。

【主な活動】

- 気軽に利用できる喫茶（火曜日･水曜日）
- 食事に困っている高齢者などのためにランチの提供（持ち帰りも可）。
- 福祉支援物販(グーチョキパン屋さん、ブルーリボン、ヒューマン、ハーモニーなど)
- 子どもカフェ(子ども食堂)月1回
- 本や衣類、小物などのリサイクルショップ
- 暮らしの悩みごと、困りごと相談の窓口(専門家につなげます)
- フラワー教室、手編みサークルアップリケの会などの趣味の場。
- 手作り作品の販売
- 暑い時期の給水所
- 地域住民の方の会合や集まりのための場所提供

活動体制

いのこの里の地域福祉担当職員…2名（パート）
ボランティアスタッフ

月1回のぽっぽ運営会議を開催し、活動内容を計画しています。

ぽっぽの運営スタッフが交替で活動しています。

活動の成果

ぽっぽの活動を初めて、4年が経過しましたが、約3年にわたるコロナ禍は、ぽっぽの活動のみならず、地域の高齢者にとって精神的にも体力にも大きな影響を与えました。

今年5月以降、ようやく地域の皆さんも開放的な生活を取り戻しつつあります。

これまでの活動の成果は以下のとおり。

①地域に、地域交流サロン“ぽっぽ”の活動が周知されてきた。
②ボランティアスタッフが主体的に運営に協力頂けるようになった。
③高齢者や、障害のある方の居場所つくりや絆を深める場所になった。
④地域の障がい者団体等とつながり、パンやケーキ、黒にんにくなどを販売した。（地域の方に大好評）
⑤地域の方が世代を問わず、気軽に来てもらえるようになった。

印象に残っている、もしくは力を入れた事例

子どもカフェを利用している子どものお母さんより、「私は仕事で夜8時ごろしか帰れないので子どもの夕食にはいつも悩んで心配していたのですが、ぽっぽで他のお子さんと楽しく食事が出来てとてもありがたいです。」と仕事帰りに立ち寄ってお礼の言葉をいただいたことが印象的です。

また、アフガニスタンやウクライナの子どもたちに送るため、手編みのマフラー、帽子、セーターを贈るボランティアニットに取り組み、編み物初心者の方も、昔編んでいた方も、楽しく交流しながら自分の作品づくりに取り組みました。

ぽっぽ通信（月1回発行）を通して、ぽっぽの取り組みを地域のみなさんに発信し、新たな方とつながり、活動の広がりができました。

ボランティアスタッフによる「ぽっぽ運営委員会」を定期的に開催し、毎月の活動を計画的に行えるようになりました。

課題と展望

今後は、コロナ前に活発に行っていた、ミニコンサートやミニ学習会、ミニ展覧会など多彩な活動が再開できることが目標です。

地域のみなさんの声を大切にし、地域交流の場において、地域の福祉課題の解決という視点も持ちながら、楽しい活動を展開していきたいと思っています。

活動風景

スタッフのみなさん

こどもカフェ障がいがある方も

ミニコンサート（クロマティックハーモニカ）

グーチョキパン屋さん

ミミフラワー教室

ウクライナ孤児院マフラープレゼント

ワンコイン型介護予防教室「健康スタジオまつばら」が地域の居場所づくりの拠点に!!

優秀賞　社会福祉法人 聖徳会

設立年月／明治35年12月1日
法人所在地／大阪府松原市阿保3-14-22
理事長名／岩田　敏郎
施設所在地／大阪府松原市阿保3-4-31
施設長名／在宅サービス事業統括所長　杉原圭祐
問合せ／☎072-289-7160　FAX072-333-2388
✉y.arima@shoutokukai.or.jp
担当：有馬　弥生

活動の背景・きっかけ

2014年の秋、サービス付き高齢者向け住宅の1階の空きスペースを活用し、当法人の新しい社会貢献の取り組みを企画することになった。もともと10年以上前から法人独自で地域向けの介護予防教室を月に2回開催しており、教室の参加者から「費用がかかってもいいので、教室を毎週開催してほしい」という声があったため、その声を信じてワンコイン型の介護予防教室を企画することになった。

活動内容

2015年5月に開設。場所は、松原市阿保3-4-31
健康スタジオまつばら。
HPhttps://goo.gl/maps/N4RAUL4eozwayNdy7
営業日時は月～金（土日祝が休み）9:30～16:00まで。
定員はプログラムによる。
費用は、1プログラムにつき、500円。材料費は実費。

【プログラム内容】
月曜日▶水彩画、コグニサイズ&ピラティス、コミュニケーション麻雀
火曜日▶くもん脳の健康教室、うた声コーラス、コグニサイズ&ピラティス、はじめての卓球
水曜日▶民踊エクササイズ、うた声コーラス、いきいき講座（体操とコミュニケーション100円プログラム）、脳トレ配布（無料）、ぼちぼちいこカフェ（認知症カフェ）、スマホ教室
木曜日▶絵手紙、初心者向け卓球、手芸
金曜日▶ヨガ、大人のジャズダンス、男の体操教室、うた声コーラス
各プログラム、定員8名～10名

活動体制

各プログラムは講師（地域住民や元ボランティア、元利用者家族）が担当。謝礼あり。
スタッフは、介護職員が3名。介護支援専門員が1名。社会福祉士が1名。
介護職員1名(長時間パート)のみ専従。他のスタッフは兼任。

活動の成果

「健康スタジオまつばら」は誰でも気軽に足を運べる施設ということで、地域の高齢者と気軽にコミュニケーションを図ることができました。何気ない会話の中から、普段の生活の様子や、家族の話、地域の話など聞くことができ、松原市で暮らしている人たちのニーズについて、よく知ることができました。また、家族介護などの課題が深刻な状況になる前に、相談いただけるようになりました。開設当初は、アウトリーチの場として認識してませんでしたが、8年間運営していく中で、少しずつ地域の相談の拠点としての役割を意識するようになってきました。最近では、ボランティアやプログラムの準備や片付けなどについても積極的にかかわってくださっています。また、スタジオを通じて、一緒に食事に行ったり、日ごろから連絡を取り合ったり、新たな人間関係を作っている参加者も増えています。

印象に残っている、もしくは力を入れた事例

金曜日の13:15～14:15で、大人のジャズダンスという:プログラムを行っています。
健康スタジオまつばらも8年間運営していると、少しずつですが平均年齢も上がっていき、開設当初よりも負荷を押さえている運動系のプログラムもあります。
:大人のジャズダンスでは、高齢者向け、高齢者に合わせたという内容ではなく、年齢に関係なく、新しいことにチャレンジをするということがコンセプトです。
講師は、この4月から近隣の大学の先生の紹介で、男性のダンサーが来てくださっています。講師も高齢者が対象者ということもあり、簡単な内容からスタートしてくれました。しかし、参加者から「幼稚園の遊戯みたい」「私たちのしたいことはこれじゃない」「このプログラムは、スタジオに若い世代（60代）に来てもらうことだったんじゃないの?」と参加者から厳しい声が挙がりました。その後、講師、参加者と一緒に限界に挑戦を掛け声に、難しいステップにもチャレンジしていただきました。最初はきついという声も挙がっていましたが、少しずつ踊ることができるようになりました。また、参加者同士で会場を借りて、自主レッスンにも取り組まれています。参加者同士の距離も近くなり、みんなで「公演会」に参加することが、新しい目標になっています。

課題と展望

課題の一つ目は収支です。ワンコインでは運営に必要な資金を賄うことができません。現在は、法人の会計で補填していますが、今後継続していくためには、行政に働きかけたり、さまざまな補助金の活用も必要だと考えています。
二つ目は広報です。コロナ前は、男の料理教室や、バス旅行、花見なども企画して、プログラム以外でも交流できる機会を作っていました。このプログラムは、スタジオのことを知ってもらうきっかけにもなっていましたが、現在は中止しています。高齢者福祉の分野においてはコロナ禍の影響は大きく、以前と同じような企画は難しいですが、スタジオを地域住民に知ってもらうきっかけになる企画を検討していきたいと思います。

活動風景

かたの七夕プロジェクト

～世代を超えて心がつながる願いごと～

優秀賞　社会福祉法人 もくせい会

設立年月／1996年9月1日
法人所在地／大阪府交野市星田5156-8
理事長名／宮部　明子
施設所在地／大阪府交野市南星台2-5-15
ケアハウスきんもくせい
きんもくせいデイサービスセンター
施設長名／池永　直美
問合せ／☎072-895-2468　FAX072-895-2469
✉kinmokusei1995@nifty.com
担当：村山　慶

活動の背景・きっかけ

コロナ禍が3年続き事業所や地域との関わりが薄くなり、住民同士も他人事のように関わりが薄くなってしまった。また、通所介護でも事業所完結型のレクリエーションや制作が多く、地域での役割りや防災に備えた関係性つくり、通所介護の垣根を超えた地域との関わりが必要である。今回は福祉サービス事業所が連携し、「誰かのために」を掲げ、世代間交流ができるように取り組んだ。交野市更生支援ネットワークが立ち上がり、交野女子学院（女子の更生施設の少年）が地域の誰かの為に役にたつという経験を通して自己肯定感を高め、再犯防止に努めることができればと考えた。

活動内容

〈高齢者通所事業所〉

各通所事業所で原案を元に6月頃から作業開始。6月下旬に各園に渡す。出来る限りの数を作成。こども園・保育園への声掛けと必要数の把握を行う。制作（4000枚以上完成）

〈こども園・保育園〉

短冊を記入し、各園の行事に合わせて飾る。お願いを書いてもらって、ゆうゆうセンターやフレンドマートに飾る。

〈交野女子学院〉

七夕飾りや短冊の原案を作成。短冊にもお願いを書いてもらいゆうゆうセンターやフレンドマートに飾る。

〈交野市〉

おりひめちゃんのイラストの使用の許可取り。保育園・幼稚園の会への声掛け。フレンドマートの調整。広報誌やプレスなどへのアプローチを行う。企画全体の後方支援。

〈社会福祉協議会〉

ゆうゆうセンターでの飾る場所の確保。笹の確保。各主体者の調整、整理。

〈ボランティアセンター〉

短冊の原案をボランティアグループ「玉手箱」に依頼し、作成。こども園・保育園の短冊の希望数によっては短冊の作成も行う。

活動体制

【主体】　通所介護、きんもくせいデイサービスセンター、ほつまデイサービス　計14事業所
【公的機関】　交野市、福祉総務課、子育て支援課、交野女子学院、交野市社会福祉協議会、ボランティアセンター、ボランティアグループ
【協力機関】　こども園、保育園（15か所）、フレンドタウン交野

活動の成果

通所介護の事業所でも「お世話をされる場所」ではなく「地域づくりができる場所」としても大きな成果があったと思う。多職種や他機関とも対話を重ねるうちに「地域と繋がりたい」という同じ思いが共通してあった。多職種他機関だからこその強みや弱みがあるが意見交換を重ねて手を取り合うことで達成することができた。高齢者が製作した短冊に子どもたちが願いごとを書き、多職種と連携し飾った七夕を家族や友人と見に行く事、その背景にたくさんの想いが詰まっており会ったことのない人とも七夕を通じて繋がることができたと感じた。交野女子学院の少年たちの再犯防止や、製作を通して小さな幸せや誰かの為になっている事に気づいてもらえたと信じています。また、読売新聞や朝日新聞、ケーブルテレビの取材で取り上げてくれたことがとても大きな成果になった。

印象に残っている、もしくは力を入れた事例

七夕プロジェクトはクリスマスの企画からつながったことなので紹介します。コロナ禍で、事業所と地域との関わりがなくなったことや、人と人の距離や関係が離れてしまうことを危惧したため企画しました。デイのレクリエーションでの工作時に、作りっぱなし・自己完結してしまう作業的なものが多いので、利用者が「誰かのために」と想い、作業が出来るものを模索し、保育園や子ども園にプレゼントするクリスマスカードを制作した。（作成数:約680個）

通所事業所だけでなく、幼稚園や保育園でも繋がりがなくなっていた事や、お互いコロナ禍で何か出来ないかと考えている事に気づくことができました。当初、通所事業所では、この企画の到着点はクリスマスカードの制作途中の「利用者がわくわくして作成している」ことだと考えていました。利用者が、見たこともない子どもたちを想い「喜んでくれるかな?」「これは　出来が悪いから、作り直そうかな」等の様子や、話すことが難しい方、うまく身体を動かせない方も シールを貼るなど、自分の可能性を感じることができ、皆さんが笑顔で作成されている光景を見ることができました。クリスマスカードを渡した後に、子どもたちや保護者、先生からのメッセージや感想を頂けたことは想定外の喜びでした。コロナによって人と人の物理的な距離が出来たのは事実ですが、心と心が強く繋がる可能性があると感じました。実は身近なところに地域と繋がるたくさんのチャンスがあり、気づいていないだけかもしれないと思いました。今後もどのように地域と繋がろうかと考えるきっかけになったことを嬉しく思います。

課題と展望

この取り組みを継続することで、様々な機関との連携が強化され自分たちの小さな力が誰かの為になっていることに気づいてもらえると感じています。交野女子学院の少年たちの顔が見えないため、やりがいや達成感が感じられにくいことが課題であるが、少年達が作った大根やスイカが、子ども食堂や高齢者施設などで喜ばれていることが、いつか少年たちの心を動かして役にたてたと実感でき、立ち直るきっかけになる事を願っています。通所介護事業所でも介護保険を使うことが人生の終わりということではなく、これから出来る事や自分の可能性をみつけて、望む暮らしや地域での役割りを感じて頂き、人生を最後まで一人の人としての生活が営めますように想っております。

活動風景

連携システム『八尾モデル』を活かして

優秀賞　八尾市特別養護老人ホーム施設長会

設立年月／平成13年12月
団体所在地／大阪府八尾市南本町3-4-5
代表者名／（社福）八尾隣保館　荒井　惠一
事務局所在地／大阪府八尾市服部川5-7-2
担当者名／（社福）高安福祉会　樋口　昌徳
問合せ／☎072-925-1175　FAX072-925-1223
✉kuboyoshimood@yahoo.co.jp
担当：（社福）八尾隣保館　久保田　佳宏

活動の背景・きっかけ

社会貢献事業が開始された当初は、46名の社会貢献支援員さんが配置されていた。その後、19名に縮小される時期があった。その中で、支援員さんへの業務負担を軽減していかないといけないとCSWの中で話し合いを持った。また、同時に各施設のCSWのスキルアップも目的のひとつにしたいと考えていた。

八尾市では、元々特別養護老人ホーム施設長会があり、施設間の連携や顔の見える関係づくりの基盤は整っていた。各施設がCSWを養成していたが、ケース対応のバラツキも見られていたので全体で関われるシステムを考えていった。八尾モデルを作ることで、経験値のバランスがとれる様になると考えていた。

活動内容

コロナ前は、年に3～4回程度の全体交流会を実施。毎回30名を超える参加者となっていた。事例検討会等を通じて、CSWのスキルアップや悩み事の共有等も図った。また、他団体（役所関係、八尾市社会福祉協議会、スマイルサポーター、障がい事業所等）との交流会も定期的に実施し、レスキュー事業の周知や理解を深めてもらったり、関係機関との連携強化を図ったりした。個別ケースを通じて、地域課題を考える場にもなっていた。

年度末には懇親会も実施し、施設長も交えた交流を図った。お酒の席で普段ではなかなかできない話や、今後の展開等を熱く話し会える場となっていた。

CSW内ではグループLINEも作製し、食材や物品支援のストック状況の共有や、ケース対応の連携等にも活用している。

活動体制

八尾市内で3つのグループに分け、それぞれに幹事施設を設置。ケース相談が入った際に、そのグループ内で2か所の施設が対応できる様に幹事施設が調整を図る。また、グループ内で対応が難しい場合は他のグループへの相談も行う。

幹事施設は1.5年毎の輪番制にし、相談がひとつの施設に偏らない仕掛けと、経験値のバランスを図っている。

3つの幹事施設は交流会の企画や準備を行い、当日の①司会②議事録③案内作成の役割を分担する。

活動の成果

全ての施設が幹事施設となり、ケース対応も実施。幹事施設になることで、今までレスキュー事業に対して少し受け身だった部分が自分事となり積極性が見られるようになった。また、交流会においても企画や準備、司会進行等の役割をすることで経験値とスキルアップが図られ、現在では誰でもファシリテーター役ができる状況となっている。八尾市全体でのボトムアップが図られている。

元々の施設長会でのつながり以上に、職員間での顔の見える関係作りや交流が図られた。仕事以外でも、ソフトボールやバドミントン、フットサルなども企画し、職員の家族も含めて交流が深まった。それにより、本来業務のデイサービスやショートステイ等の事業にも好影響を及ぼした。

印象に残っている、もしくは力を入れた事例

●3つの施設が連携しながら対応したケース。

生活課題のある20代夫婦と、発達課題のある2歳の子の世帯が八尾市に転入していた。妻は特定妊婦でもあり、他市から引継ぎを受けていた保健センターが訪問。その時点で生活困窮やさまざまな課題があることが判明し、レスキュー事業にも相談。八尾市地域共生推進課つなげる支援室が中心となり支援チームを作成。

世帯全体での課題は『生活困窮』『無就労』『負債・滞納』『出産』『子育て』『障がい疑い』『発達障害』『ネグレクト』『孤独・孤立』とさまざまな事が重なりあっていた。

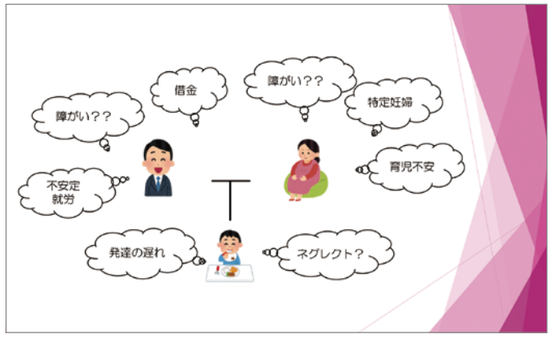
地域共生推進課が調整し、保健センター・障害福祉課・生活福祉課・子育て支援課・八尾市社会福祉協議会・レスキュー事業・居住支援法人等が参加し複数回会議を実施。その中で役割分担と連携強化を図りケースに寄り添った対応を続けていた。

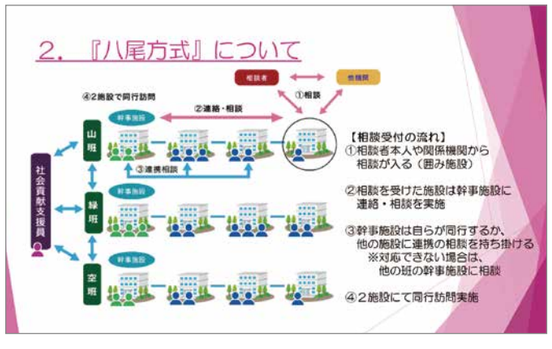
レスキュー事業では、生活状況を確認し定期的な訪問や食料や家具、家電等の生活用品の提供を実施。すぐに解決できる内容ではなく、少し時間と労力がかかるケースと判断し、3つの施設が連携しながら負担なく対応できるように調整を図った。

課題と展望

『八尾モデル』を進め、10数年が経っている。当初のメンバーがそれぞれの施設で役職者となったり、立場が変わったりしていることもある。また、コロナの影響もあり交流会等も開催できていない状況。今後、若手の養成やICTを活用した新たな『八尾モデル』の発展が必要と考えている。さらには、八尾市社会福祉施設連絡会等を通じて児童分野や障がい分野との連携強化、重層的支援体制整備事業を進める八尾市行政との連携強化も必要となっている。『八尾モデル』を活かして、中間的就労事業や居住支援等も含めたさらなる発展が八尾市では期待できる。

活動風景





高齢者の居場所作り

～いつまでも「エール香陽」に行こうよう!～

奨励賞　社会福祉法人 聖徳園

設立年月／昭和42年1月
法人所在地／大阪府枚方市香里ケ丘4丁目17-1
理事長名／三上　美知恵
施設所在地／大阪府枚方市香里ケ丘3丁目15-1
施設長名／吹上　正一
問合せ／☎072-854-5826　FAX072-852-7105
✉hirahome@shotokuen.or.jp
担当：野坂　崇将

活動の背景・きっかけ

これまで特別養護老人ホーム内で、地域貢献事業（健康体操や学びの場の提供、カフェ、夏祭りなど）に取り組んできました。2015年には、施設から積極的に地域へ!との思いから、特養に地域連携課が設置されました。

特養のある校区では、各種会議への参画や出前講座の実施、校区祭りへの出店などを通じて関係を深めていたところ、2019年7月、地域包括支援センター主催の会議で校区コミュニティ会長・校区福祉委員会会長とお会いしたことで隣接校区に繋がることができました。

その場で「何かお手伝いできることがあればいつでも!」とお伝えしたところ、「自宅から出ない高齢者が多く、何かきっかけを作りたい地域がある。ご協力いただけないか」とご相談いただいたことがきっかけです。

活動内容

【目的】隣接校区の高齢者の居場所作り。

対象エリアは一戸建てが並ぶ閑静な住宅街。一区画も大きく、公共交通機関までも少し距離があるため、基本的には車両か徒歩での移動が主となる。高齢化も進んでおり、自宅から出かけることが少ないことで、体力的に不安のある方が多い。また不安や心配事が内に籠りやすい環境。

まずは、家から出て集うきっかけをつくることから始め、少しずつ居場所として形作り、いずれは参加者による自主的な運営になることを目指す。

【内容】施設よりリハビリ職員を派遣、60分の体操教室を定期的に実施
ご当地体操15分➡リハビリ体操15分➡腰痛・転倒予防体操、筋力アップ体操など30分
【頻度】第1・3水もしくは第2・4水の2回／月
【参加人数】5～20名（コロナ禍では人数制限あり）
【場所】自治会館、自法人のホール、公園など

活動体制

- **ひらかた聖徳園地域連携課**▶方針検討、法人内調整
- **ひらかた聖徳園デイケアセンター**▶方針検討、講師派遣
- **元気づくり会議（第2層協議体）**▶方針検討、方針決定、進捗管理
- **校区コミュニティ協議会**▶各機関調整、広報
- **校区福祉委員会**▶方針検討、連絡調整
- **地域包括支援センター**▶事務全般、情報提供
- **枚方市社会福祉協議会**▶方針検討

活動の成果

感染症の分類が変わった現在も会が存続し定期的に活動していること、そして何よりも運営の自主化に一歩踏み出せたことが成果だと考えています。

動き出した頃が、ちょうど新型コロナウイルス感染症の始まりであったため、何度となく中断・中止となりました。もともと何らかの活動地盤があった訳ではなく、自宅から出てきていただくために何ができるか?を一から考えての取り組みであったため、新型コロナウイルス感染症を理由にしてしまえば、簡単に無くなってしまう恐れがありました。

自宅でできる体操教材を配ったり、場所を工夫して、人数制限や換気に努めながら少人数でも続けたりと、かかわったスタッフが一丸となって、何よりも「気持ちをつなぐ」ことに尽力した結果だと思っています。

印象に残っている、もしくは力を入れた事例

今年度印象に残っていることは、前段と重複しますが、新型コロナウイルス感染症の分類が変わったことを機に、一気に運営の自主化が進んだことです。

開始したころは、参加者の皆さんに対して、時間いっぱいまでこちらから実施内容を提供するばかりでした。ゼロベーススタートでしたので、少しずつこちら側の熱（想い）を参加者の皆さんに伝播させられればいいなと思っていた矢先、新型コロナウイルス感染症の発生・蔓延により、何度も中断・中止を繰り返すこととなりました。

「いつかはコロナが終わる時がくる。その時に集う場所も人もないではなく、その時にすぐに動けるように。なんとか気持ちをつないでいきましょう」との思いで、やり方や場所、内容など色々と頭を捻ってみんなで取り組んできました。

参加者の皆さんが、役割分担や内容をどんどん話し合って決められていく様子をみていて、長かった期間を振り返りながらも、本当に続けてきてよかったと思いました。

課題と展望

課題は、数値としてのエビデンスが乏しいことです。

まずは「自宅から出ていただくこと」が最初の目的だったので、当初は気にしていませんでしたが、取り組んでいる内容が、参加者自身にも目に見えて（結果として）お渡しできれば、気持ちをつなぐこともよりやり易くなったのではないかと思っています。

展望は、完全自主化と拡大です。

現時点では、運営の自主化はなされましたが、内容については、まだお手伝いを必要とされています。

講師がいなくとも、当日参加された方が講師役となって進めていけるように、色々なメニューをお伝えしたいと思っています。

また、この取り組みを成功例として、他の必要な地域にも広げていきたと思っています。

活動風景

コロナ前、取り組み初期で賑やかな様子です（第1・3水）

コロナ禍、感染予防のためと閉じこもりがちになっている地域の皆さまへ、自宅でできる体操やお便りを配布しました

コロナ禍、密を避けるためお花見ウォーキング&体操を実施しました

withコロナ、役割分担や運営について話が出るなど、少しずつ自主運営の活動へ移行する兆しが見えてきました

withコロナ、自主化への移行にあたり参考になればと、参加者へ体操等をファイリングして配布しました

withコロナ、参加者がもっと取り組みたいと近隣の公園へ集い、自主的に運動や脳トレを実施されています（第2・4水）

出張相談会（市役所への無料送迎あり）

奨励賞　社会福祉法人 成光苑

設立年月／昭和49年7月
法人所在地／大阪府摂津市千里丘3-16-7
理事長名／高岡　國士
施設所在地／大阪府摂津市桜町1-1-11
施設長名／藤原　義章
問合せ／☎072-632-0400　FAX072-632-9990
✉m-shimomura@seikouen.org
担当：下村　宗治

活動の背景・きっかけ

令和3年度から5年度までの高齢者施策の指針となる「第8期せっつ高齢者かがやきプラン（摂津市高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画）」のアンケートで、市役所へ直接向かう交通手段がないため、手続きに行きにくい地域があることを把握する。そこで、令和4年度に摂津市高齢介護課と共同で、出張相談及び必要時に市役所で手続きができるよう無料送迎の試行を行った。

活動内容

令和4年度に計3回、摂津市高齢介護課と社会福祉法人成光苑（以下成光苑）が共同で、出張相談会と摂津市役所への無料送迎を実施した。

費用の殆どが送迎車のガソリン代で、チラシの印刷代などもあった。相談時のアクリル板や非接触温度計、ノートパソコン、ポケットWi-Fiなどは施設にあるものを持参した。広報やチラシ、アルコールなどは摂津市高齢介護課が用意した。

①8月19日11:00～15:00、大阪府営摂津南別府住宅（南別府団地）で、費用は2,164円だった。
②11月25日11:00～15:00、大阪府営摂津南別府住宅（南別府団地）で、費用は864円だった。
③3月20日11:00～15:00、市場公民館で、費用は960円だった。

活動体制

①8月19日11:00～15:00は、大阪府営摂津南別府住宅（南別府団地）で、相談担当として摂津市高齢介護課2名と成光苑5名、市役所への無料送迎バス運転手として成光苑1名が担当した。
②11月25日11:00～15:00は、大阪府営摂津南別府住宅（南別府団地）で、相談担当として摂津市高齢介護課2名と成光苑5名、市役所への無料送迎バス運転手として成光苑1名が担当した。
③3月20日11:00～15:00は、市場公民館で、相談担当として摂津市高齢介護課2名と成光苑7名、市役所への無料送迎バス運転手として成光苑1名が担当した。

活動の成果

①8月19日11:00～15:00は、大阪府営摂津南別府住宅（南別府団地）で、相談者3名、市役所への無料送迎バス利用者3名が利用した。市役所で緊急通報装置の申請を行った。
②11月25日11:00～15:00は、大阪府営摂津南別府住宅（南別府団地）で、相談者16名、市役所への無料送迎バス利用者1名が利用した。市役所で要介護申請を行った。
③3月20日11:00～15:00は、市場公民館で、相談者3名、市役所無料送迎バス利用者0名が利用した。

印象に残っている、もしくは力を入れた事例

大阪府営摂津南別府住宅（南別府団地）の1回目では、緊急通報装置の申請を行いたかったが、市役所へ行けないために申請ができなかった方に対して、相談後に市役所で申請を行うことができた。事前に情報提供していたため、窓口での手続き時間も短縮でき、相談者本人の負担が軽減でき、とても喜んでいた。

2回目では、自治会長に団地の全戸にチラシを事前配布して頂いたことで、相談者数が急増した。また、摂津市高齢介護課が該当する相談だけではなく、保健福祉課（健康診断の助成など）や市内無料巡回バスの件など、様々な相談を受け付けることができた。

課題と展望

大阪府営摂津南別府住宅（南別府団地）の自治会役員が毎年総入れ替えするため、年度が替わると新自治会長に初めから説明しなければならない。

摂津市千里丘地域は、吹田市と隣接しているため、出張相談会の開催場所によっては、対象外（吹田市民）の方が多く、相談件数につながらなかった。

令和5年度からは、摂津市社会福祉協議会・摂津市地域包括支援センター、摂津いやし園が新たに参加することで、相談エリアが2か所から3か所に、相談内容も市役所関係、介護保険関係に加えて、様々な相談にも対応できるようになる。

活動風景

市役所送迎

受付

市役所用相談ブース

成光苑相談ブース

入口

看板

地域のかけはしになれるか?!『にこにこ食堂』

奨励賞　社会福祉法人 玉美福祉会

設立年月／1977年12月14日
法人所在地／大阪府東大阪市若江西新町3-1-9
理事長名／西島　善久
施設所在地／大阪府東大阪市玉串町東1-10-20
施設長名／西島　勇太
問合せ／☎072-966-2018　FAX072-966-5015
✉h-houkatu@tamami.or.jp
担当：山田　美代子・打田　千歌

活動の背景・きっかけ

コロナ前には認知症当事者の活動の場として子ども食堂・大人食堂を行っていたがコロナ禍をきっかけに多世代地域交流の場がなくなり、多くの高齢者にコロナフレイルが見られるようになった。地域の高齢者と多世代交流の場を再構築すべく、3年ぶりに再開。食事を食しながら交流が深める場づくりができると良いと思う。また、閉じこもり予防で開始した『ちくちく会』。手芸づくりの好きなメンバーが集まり、『にこにこ食堂』で販売。（くるみボタンや髪飾り、ブローチなど）作品を販売することで会話が生まれ、同世代の方が作ったとのことで刺激が得られたり、やりがい支援、活動意欲の引き出しが図れているのではないかと思う。

活動内容

毎月第4土曜日、11時半～13時で『にこにこ食堂』開催。

高齢者ケアセンター交流スペースを使用。大人は300円、子どもは無料でカレー、サラダ、飲み物を提供。帰りには大阪府からのお土産（缶詰やゼリー・ハンバーグ等）も付く。（子ども食堂運営に関する補助金などは利用せず。）毎回子どもさん約15食、大人約35食で計50食を準備し完売。

カレーの材料は一部、地域住民さんからの差し入れ（玉ねぎなど）を提供して下さることもある。

活動体制

当日の朝に施設スタッフ（管理栄養士、看護師、特養・包括・居宅職員など）

それぞれ受け持ちを決めて、調理は朝から調理師資格を持つ職員中心に仕込む。認知症高齢者で「私も本当は働きたい」とおっしゃる方にカレーのお給仕を手伝って頂くこともあり。オレンジサポートボランティアさん（認知症教育を受けられた社会福祉協議会所属のボランティア）のサポートも受けている。受付、代金授受、お給仕、片付けなどを上記スタッフで役割分担する。最近は、近隣大学の健康栄養学科の生徒さんが「地域の実情を知りたい」と手伝いに来て下さっており、若いスタッフの手伝いに現場も華やいでいる。

活動の成果

にこにこ食堂を実施することで、子ども～大人まで色々な方が一同に介しコミュニケーションが生まれている。「何年生になったの?」「可愛いね!」等。どのような世代の方も集える場所として向日葵が認識して頂けるのではないかと思う。また、認知症の方のやりがい支援を実施することで、認知症になっても輝ける地域づくりの実際を住民さんにも感じて頂ければと思う。

大学生ボランティアは今後、管理栄養士としてそれぞれの場所での活躍が期待される。その際、所属する組織の中だけでなく地域に視点を向け、多職種連携を鑑みながら活動して頂けるのではないかと思う。また、色々な方に来所頂く事で個人々の困りごとも見えてきて、対応する事ができる。

印象に残っている、もしくは力を入れた事例

去年仕事をやめ、それから認知症が進行してしまった女性。「一人暮らしで誰とも喋らないの。その上、仕事をやめ、コロナで自宅にこもりうつになってしまったの…本当はもう一度働きたいなぁ…。」と。その言葉からにこにこ食堂でのお手伝いにお誘いすることとなりました。最初はエプロンも向日葵からの貸し出しであったが、その内「素敵なエプロン買ってきたよ!」と笑顔。食堂のお給仕を手伝ってもらいながら、皆に「助かったよ」と声を掛けられることでやりがい支援に結び付けることが出来たのではないかと思う。

また、自宅で閉じこもりがちだった手芸好きの方々で集う『ちくちく会』。クルミボタンでの髪飾りやブローチを作成し、販売することで、得意なことで活躍できる場づくりに繋がっているのではないかと思う。子ども食堂に来た中学生男子が母親に買って帰ったこともあった。双方に喜ばれる活動に繋がっているのではないかと思う。

課題と展望

多世代食堂でありながら、子どもさんの参加は毎回10～15人程度。小中学校でのチラシ配りをお願いしているが、なかなか告知が行き届かない。コロナで途絶えがちであった小中学校との交流を再度構築し、食堂への参加をお誘い出来ればと思う。また、認知症当事者さんの体調や気分的なもので、参加頂けないこともある。併せて、参加して頂くにも、事前告知や送迎が必要な場合もあり安定して細やかな支援が出来ればと思う。ご家族からの支援も難しい場合がありマンパワーの不足を感じる。もう少し地域の他機関やボランティアさんなどの協力が仰げたらと思います。

活動風景

『もったいない』を『ありがとう』に変えるフェスタ

奨励賞　社会福祉法人 八尾隣保館

設立年月／昭和10年5月
法人所在地／大阪府八尾市南本町3-4-5
理事長名／荒井　惠一
施設所在地／大阪府八尾市青山町4-4-18
施設長名／片山　弘美
問合せ／☎072-925-1175　FAX072-925-1223
✉kuboyoshimood@yahoo.co.jp
担当：久保田　佳宏

活動の背景・きっかけ

レスキュー事業を進める中で、食材や生活用品の循環が必要となっていた。八尾市内の各施設において、レスキュー事業の対象者に必要とされる布団や電化製品等をストックする流れが出来ていた。それは、それぞれの利用者や地域の方から『もったいない』物の提供を受ける状況だった。

その活動の中で新たなつながりが出来、店舗には出せないが少しの汚れやほつれがある新品の衣類の提供を受けることとなった。若者に人気のブランドにはなるが、必要とされる方に提供する際にはブランドタグを切る必要があったため、フェスタを開催し関係機関の協力と連携を図った。

活動内容

年に1回程度フェスタを開催。サポートやおにある多目的ホールを無料で借り、仕分け作業等を実施。衣類の仕分けやブランドタグのカット、生活用品の掃除や点検等を実施。その場で必要な物があれば各団体さんへ持って帰ってもらうシステムにて実施。『もったいない』ものを『ありがとう』へ変える形となる。

八尾市内のレスキュー事業CSWや若者支援を行っているNPO法人、女性シェルター等の実施団体、障がい者施設の方、居住支援法人、八尾市地域共生推進課、八尾市社会福祉協議会等へ声を掛け30名程度の参加がある。また、地域住民やレスキュー事業で支援した方にもお手伝いのお願いをして「支援される側」から「支援する側」へ回る工夫も検討している。

参加者間の交流もフェスタの目的のひとつでもあるためたこ焼きパーティも実施。（2万円程度は八尾隣保館負担）

活動体制

準備等は八尾隣保館のCSWにて実施。開催案内や会場の手配等を実施。当日の会場の準備や仕分け作業等は参加者全員で役割分担を行い、楽しみながら作業を進めていく。

物品も定期的に循環させないと古くなったり、使えなくなったりすることも多々ある。廃棄となれば各施設の負担ともなっている。フェスタを通じて必要な団体さんへ使ってもらう様に心掛けている。また、衣類等で使えないものは、地域の子ども会での廃品回収へ回し、無駄が無いようにして、活動費にあててもらっている。

活動の成果

本来であれば捨てられてしまう『もったいない』物が、必要な方に届き『ありがとう』に変わっている。八尾市での小さなSDGsともなっている。物品を提供してくれる方々にも活動の内容をフィードバックし、自分の行動が良い事につながっていると実感してもらっている。また、仕分け作業に関わっている人々には必要な物を持って帰ってもらい他団体との交流も図ってもらっている。主催者も新しいつながりもでき、さらなる事業発展にもつながっている。関わる全ての人が笑顔になるフェスタになっている。

これらの物品は、火事に遭われた方、DV被害等で避難された方、刑務所から出所された方、ウクライナ避難者にも活用できている。

印象に残っている、もしくは力を入れた事例

コロナも落ち着いた4月にフェスタを開催。衣類を提供してくれるメーカーさんからは大きな段ボールで10箱を受け取る。本来であれば業者を利用して廃棄するため、無駄なお金がかかってしまうし、ずっともったいない事をしていると感じていたとの事だった。

当日は、さまざまな団体さんが参加。大阪で若者支援等を先駆的に実施している方も参加され、SNSでの活動紹介もしてくれている。その方は子ども家庭庁政策参与でもあり影響力も大きかった。他にも女性シェルターの事業をしている法人さんも来られ、若者向けの衣類で新品も物はとてもありがたいと言って頂いた。

レスキュー事業で支援した20代前半の女性にもお手伝いのお願いをして参加して頂いた。今後も「支援するされる側」で終わるのではなく、何か活躍できる場を案内し、「支援する側」へも回ってもらえる工夫を考えていきたい。

課題と展望

以前から各施設にて生活用品等の循環を行っていた。しかし、需要がないと古くなり廃棄せざる得ない状況にもなっていた。家電等では故障等のリスクもあり、リサイクル料金の課題もあった。今後も、必要なものが必要なタイミングで循環できる様なシステムを作っていきたい。

八尾市行政、社協、フードバンク等、子ども食堂、企業、その他さまざまな団体さんへも声を掛け、八尾市全体で取り組める活動にしていきたい。八尾市が掲げる「おせっかい日本一」の活動のひとつにもしていきたい。

活動風景

仕分けフェスタたこパ

仕分けフェスタ風景

なごみ食堂

奨励賞　社会福祉法人 ライフサポート協会

設立年月／1999年7月6日
法人所在地／大阪府大阪市住吉区帝塚山東5-10-15
理事長名／村田　進
施設所在地／大阪府大阪市住吉区帝塚山東5-10-15
施設長名／福留　千佳
問合せ／☎06-6676-0753　FAX06-6676-4006
✉kyotaku12@nagomi.lifesupport.or.jp
担当：門馬　悠樹

活動の背景・きっかけ

なごみ特養に住まわれておられるご利用者の普段の過ごし方として、ご利用者の方が「ありがとう」と他者に伝える機会は多くあれど、逆に「ありがとう」と伝えてもらう機会というのが、ありがとうを伝える機会に比べ圧倒的に少ない環境に違和感を感じていました。

関係性を大切にしていきたいと考えており、どちらか一方だけのバッカリ（助けてもらってバッカリ等）は、相互の関係性ではなく、する側される側の一方通行の関係性になりやすく、関係性に不和が生じてしまうと感じております。

なので、「ありがとう」を伝えあえれるような、相互の関係性が持てる日常を紡ぎだしていきたいと着目した1つが昔の杵柄で、料理が上手・好きな方・生活の一部であったご利用者の方々にご相談し、地域向けになごみ食堂を開催していくことになりました。ご利用者の方々にとって、『ワテらも、まだまだいけまっせー』といった活力に結び付く一助となり特養のイメージにも変化をきたすことができればとも願っております。

活動内容

【なごみのじいちゃん、ばあちゃんと一緒に楽しくご飯を作って、一緒に美味しいご飯を食べようー】という活動です。

毎月第3火曜日、なごみ1階地域交流室にて30名ほど（売り切れ次第終了）対象に、1家族100円（5人家族なら1人100円ではなく5人で100円）でなごみ食堂を開催しています。調理16～18時　食事18時～19時

活動体制

中心は、なごみ特養に住まわれておられるご利用者の皆さまと、管理栄養士、特養職員となります。（ご利用者の皆さんがおられないと料理が作れません）

調理から参加下さる参加者の皆さまにも一緒に作って頂き一緒にいただきます！して食べます。

食材や器具などは地域の方からの寄付であったり、つながりある事業所からの食材提供、フードバンク大阪さんからの食材提供なども活用しています。

活動の成果

活動を通しての振り返りとしまして、参加者の声として「自分でごはん食べにいけるところなんてないもん･･･」というお声がありました。何かしらの生きづらさを抱えておられる方が気軽にいける居場所というのが、まだまだ少ないのかな～と考えさせられると共に、この人にとって、ここ（なごみ食堂）は、つながりのある場に結び付いてくれているのかな～という体感はあります。

特養に住まわれている〇〇さんが、その場（特養）で家族と一緒にご飯を食べるという機会が少なくなってしまうと感じるのですが、特養に住まわれているお母さんと、その娘さんが一緒にご飯を食べる。という“あたりまえ”の場面が紡ぎだしやすいとうのもこの活動のいいところであると感じています。

印象に残っている、もしくは力を入れた事例

どうしても何かをするとなった時に、単発の企画ものというありようになりがちですが、そこ（特養）に住まわれている方々おひとりお一人の生活の継続、再構築に力をいれています。

住まわれている方（ご利用者）とご一緒に、ご飯をどうするか考える、チラシを見ては安いものを探し買い物にでかける。フロアーの台所でご飯を作る。包丁の音等といった料理の音で目が覚める人、「ええにおいしてるな～」と料理の香りにつられて来られる人、「今日の味付けはいけてんな～」「これ辛すぎる、もうちょっとやな･･･」と料理評論家になられる人。お一人おひとりにとっての暮らしの継続ができるように、安易にご本人ができることを奪わない、ご本人ができること、大切におもっていることを一緒に大切にできるような関わりを大切に試行錯誤しながら、関係づくりに力をいれています。

課題と展望

関係性の歯車をくずすのが、双方向の関係ではなく、一方通行になりやすい管理であると感じています。ご本人の出来ることを減らさない、ご本人が出来るためにご自身の物を増やす、出来る場・環境を見出す、今までの関係性を断ち切らず、新たな関係づくりを紡ぎだしていくといったことを実践していきたいと考えています。

ですが、どうしても管理しているありようも、まだまだあるな～というのが現場を振り返っての課題です。

今後も、本人支援を行うことが楽しいと思える実践を増やしていきたいと思います。

活動風景

※ご利用者・ご家族了承のもと写真を使用しています。

令和5年度 大阪府社会福祉協議会 老人施設部会
社会貢献事業「優秀実践アワード（きらっと光る実践）」募集要項

1 目　的

この表彰は、地域における公益的な取り組みに関して、継続性や独自性、先進性等についての優れた取り組みを行っている、大阪府社会福祉協議会　老人施設部会の会員施設（以下、「会員施設」という）を表彰することにより、その取り組みにスポットを当て内外に情報発信を行うことを通して、会員施設に波及させるとともに、地域課題の解決および地域福祉の振興、さらに社会的評価の向上、ひいては福祉･介護人材の確保に資することを目的とします。

2 表彰種別

優秀実践アワード（きらっと光る実践）「優秀賞」および「大賞」

地域課題の解決および地域福祉の振興、社会的評価の向上、福祉･介護人材の確保のため、“きらっと光る” 地域における公益的な取り組みを実践している会員施設を表彰します。

【選定に当たっての着眼点】

①継続性
- 一過性の取組でなく、継続して行われている
- 取組の内容の見直しが必要に応じ行われている

②独自性
- あまり紹介されていない取組、先行事例に工夫を加えた取組である

③先進性
- 今後の地域を取り巻く環境を見据えた取組である

④展開性
- （あまり手を加えずとも）他の事業所での実施が可能である

⑤模範性
- 他の会員施設での実施が望まれる取組である

⑥協働性
- 地域住民や関係機関･団体等と連携した取組である

⑦地域貢献性
- 個別あるいは地域課題の解決につながっている
- 地域福祉の向上に寄与している

3 対　象

(1) 推薦対象（自薦･他薦問わず）

- 次のいずれにも該当する施設であること。

①大阪府社会福祉協議会 老人施設部会の会員施設

（特養分科会、養護分科会、軽費分科会、在宅分科会のいずれかに所属していること）

※法人あるいは施設として応募が可能です。また、施設連絡会としての応募も可とします。

※特別養護老人ホームや養護老人ホーム等に併設され、一体的に運営されている通所介護等の居宅サービスについては、「本体施設」に含めて表彰の対象とし、個別には表彰しません。

②令和4年度の特別部会費（社会貢献基金）を納入済みである

(2) 対象となる実践

- 令和4年度の地域における公益的な取り組み（実践）であること。

※「地域における公益的な取り組み」の具体的な事例については、老人施設部会　社会貢献事業「取り組み状況見える化シート」の項目を参考にしてください。

4 応募期限

令和5年7月31日（月）まで（当日、到着分まで有効）。

5 応募方法

(1) 提出書類

- 「社会貢献事業『優秀実践アワード（きらっと光る実践）』推薦書」
- その他参考となる資料（2点まで）

(2) 提出方法

- 提出書類に必要事項を記入し、応募期限までに下記提出先へメールでお送りください。

※応募書類のデータ容量は、全てを合わせて、5MB 以内を目安とします。
（5MBを超える場合は、「ギガファイル便」等を用いてメール送信してください）

※書類を受理した旨のご返信をいたしますので、返信メールが届かない場合はお電話ください。

(3) 提出先

大阪府社会福祉協議会 老人施設部会事務局（担当:青木）
TEL:06-6762-9001　FAX:06-6768-2426　E-mail:sakurasou@a-kaigo.gr.jp

6 選定方法

◆書類審査　選考委員会を構成する外部委員が、応募書類について「選定に当たっての着眼点」にもとづき内容を評価します。
なお、応募者が多数の場合は、老人施設部会　社会貢献事業推進委員会による一次選考（書類審査）を行う場合がございますので、あらかじめご了承ください。

◆選考委員会　書類審査を経た会員施設を対象に、老人施設部会が設置した「選考委員会」において選定のうえ、表彰施設を決定します。
※選考過程は公表いたしませんので、ご承知おきください。

（選考委員会の構成）

学識者	福井県立大学　看護福祉学部　社会福祉学科　教授	奥　西　栄　介 氏
学識者	大阪人間科学大学　人間科学部　社会福祉学科　准教授	石　川　久仁子 氏
学識者	大阪城南女子短期大学　現代生活学科　教授	前　田　崇　博 氏
関係機関・団体	国民生活産業･消費者団体連合会　業務部　マネージャー	阪　田　啓　太 氏
関係機関・団体	大阪府生活協同組合連合会　専務理事	中　村　夏　美 氏

7 通知方法

選考の結果は、令和5年11月初旬頃にメールで通知します。

8 表　彰

令和5年11月29日（水）に開催予定の「社会貢献事業20周年のつどい（@シティプラザ大阪）」において、老人施設部会長名で表彰状を授与します。

9 その他

表彰された会員施設については、令和6年度老人施設部会総会の資料に掲載して紹介するとともに、Webサイト「さくら草ネット」において公表いたします。また、表彰対象になった取り組み･具体的な実践については、老人施設部会発行の「実践事例集（仮称）」への掲載や、入選した全ての法人あるいは施設を対象に「入選施設一覧（仮称）」の作成も検討いたします。

令和5年度

社会貢献事業
「優秀実践アワード（きらっと光る実践）」
報告書

●発　行●
令和6年5月
●企画・編集・発行●
社会福祉法人 大阪府社会福祉協議会 老人施設部会
社会貢献事業推進委員会
〒542-0065 大阪市中央区中寺1-1-54
大阪社会福祉指導センター内
TEL:06-6762-9001
FAX:06-6768-2426